

別府大学 学士課程教育に関する3つのポリシー

別府大学は、学士課程教育の充実、教育の質の維持・向上を目的として、建学の精神や教育目的を基礎に、各学部・学科の「3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）」を定めています。別府大学は、この方針に基づいて教育の充実を図るとともに、学生の学びの内容と水準を維持・向上させていきます。

文学部

国際言語・文化学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

国際言語・文化学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」「専門力」「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士（文学）の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養（人間性の形成に資する幅広い知識、技能）

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力などの基礎的素養を身につけ、本学の建学の理念、教育方針等を理解している。
- (2) 特定の主題について、多角的、総合的、複合的に思考する能力を身につけ、体験や実践の中から学ぶことができる。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な基礎的素養を身につけ、情報処理や英語の基本的なリテラシーを身につけている。
- (4) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力（専門に関する基本的な知識、技能）

- <社会的意義>文学や芸術のもつ社会的な意義や、文学や芸術を学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。
- <職業生活で評価される能力>文学や芸術の専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特に日本語・日本文学コースは日本語力及び文章力、英語・英米文学コースは英語力及び文章力、芸術表現コースは創造力及び作品制作能力を身につけている。

<専門に関する能力>

(1) 日本語・日本文学コース

- ①上代から近現代にいたる日本文学の歴史、外国文学の影響、表現技法の特色などを古典や名著を精読して理解し、作家・作品研究の基礎を身につけている。
- ②日本語について音声や語彙、文法、歴史等に関する知識を多角的に修得し、日本語研究の基礎能力を身につけている。

(2) 英語・英米文学コース

- ①英文を正確に記述し、会話できる能力を身につけている。
- ②英語について音声や語彙、文法、歴史等に関する知識を多角的に修得し、英語研究の基礎知識を身につけている。
- ③英米文学作品を精読し、英米文学の歴史、文化、作家等を深く理解し、考察できる。

(3) 芸術表現コース

- ①芸術表現、美術史、言語表現についての幅広い知識を修得し、美術史研究と比較文化研究の基礎能力を身につけている。
- ②マンガ、デザイン、映像・アニメーション、絵画の作品を創作する知識・技能を修得する。

(4) コース共通

- ①4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究や制作を行い、論文や作品にまとめることができる。

3. 汎用力（社会で活用できる汎用性のある能力）

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮するとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働力、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心を持ち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

国際言語・文化学科は、ディプロマポリシーに示された学修成果（到達目標）を身につけるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果（到達目標）を適切に分類した科目区分（科目群）を設け、その科目区分（科目群）に応じた科目を設定することを基本とする。各コースで必ず学習すべき内容を扱う科目はコース必修とし、科目の内容に応じて講義＋演習・実験・実習の構成により理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目区分と科目を置く。

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力など基礎的素養を培うために必要な導入教育を行い、本学の建学の精神、教育方針等を学び、学生の学習意欲を高めるため、1年次に科目区分「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの専門分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うため科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な教養を身につけ、情報処理や英語のリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれその内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目群を置き、それぞれの科目群の要請する内容を偏りなく包含する諸科目を設定する。なお、文学、芸術を学修することの社会的意義に関しては教養科目の「基礎演習」で扱い、職業生活で評価される能力に関しては全ての専門科目で分担して扱う。

(1) 発展演習・専門演習・卒業演習

教養科目の「基礎演習」と一貫する科目群として以下の少人数演習を置く。

- ①専門の基礎的な知識・能力を高めるための科目として2年次に「発展演習」を置く。
- ②専門の知識や考え方を深めるとともに、課題の探求力、発表能力などを高め、卒業演習につなげるための科目として3年次に「専門演習」を置く。
- ③テーマを絞って専門の学修を深め、4年間の集大成となる卒業論文（卒業制作）又は卒業研究を完成させるための科目として「卒業演習」を置く。

(2) 学部共通専門科目

文学部各学科共通に履修できる人文系、社会科学系、芸術系の入門的・概論的な知識、技能を修得するための科目群を置く。

(3) 学科専門基礎科目

日本語・日本文学コース、英語・英米文学コース、芸術表現コースの基礎的な知識・技能を修得するための科目群を、各コース共通に幅広く履修できるように学科専門基礎科目（コース共通科目）として置く。

(4) コース専門科目

日本語・日本文学コース、英語・英米文学コース、芸術表現コースの学修のための専門的な知識・技能を修得するための科目群を下記のコース専門科目として置く。

①日本語・日本文学コースのコース専門科目

- 1) 上代から近現代にいたる日本文学の歴史、外国文学の影響、表現技法の特色などを古典や名著を精読して理解し、作家・作品研究の基礎を身につけるための科目群。
- 2) 日本語について音声や語彙、文法、歴史等に関する知識を多角的に修得し、日本語研究の基礎能力を身につけるための科目群

②英語・英米文学コースのコース専門科目

- 1) 英文を正確に記述し、会話できる能力を身につけるための科目群
- 2) 英語について音声や語彙、文法、歴史などに関する知識を多角的に修得し、英語研究の基礎知識を身につけるための科目群
- 3) 英米文学作品を精読し、英米文学の歴史、文化、作家等を深く理解し、考察する能力を身につけるための科目群

③芸術表現コースのコース専門科目

- 1) 芸術表現、美術史、言語表現についての幅広い知識を修得し、比較文化研究の基礎能力を身につけるための科目群
- 2) マンガ、デザイン、映像・アニメーション、絵画の作品を創作する知識・技能を修得するための科目群

(5) 卒業論文・卒業制作・卒業研究

4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究や制作を行い、論文や作品にまとめるための科目群

3. 専門科目、教養科目の共通事項

(1) 授業の内容・方法

- ①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果（到達目標）については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果（到達目標）を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。
- ②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。

(2) 初年次教育

多様な新入生全員が、学習意欲を沸き立たせ、自ら人間関係を築き、学修計画を立て、主体的な学びを実践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の配当科目、授業内容・方法を工夫する。

(3) キャリア教育

教養科目では、学部・学科共通のキャリア関連科目を置く。専門科目ではそれぞれのコースに応じ、英語能力、日本語文章力、創作力など社会で評価される実践的な知識、技能を修得するよう授業内容・方法を工夫する。

(4) 資格科目

中学校教諭一種免許状（国語・英語・美術）、高等学校教諭一種免許状（国語・英語・美術）、司書、司書教諭、学芸員、日本語教員の免許・資格を取得するための科目を設定する。

(5) 学修成果（到達目標）の達成度の評価とカリキュラムの改善

教員による達成度評価、学生自身による達成度評価のほか、卒業生調査などによって社会からの外部評価を適宜加え、カリキュラム全体の達成度評価と課題の明確化、改善案の策定などを行う。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

(1) 学科教育の特色と育成する人材像

国際言語・文化学科には、「日本語・日本文学コース」、「英語・英米文学コース」、「芸術表現コース」という3つのコースがあり、学生は3つのコースから自らの関心に基づいて自由にコースを選び、そして他のコースをも副コースとして選択して学習することができます。また本学科では、国語・英語・美術の教職資格と、図書館司書・学芸員の資格が取得できます。

本学科は、文学、言語、芸術の分野について十分な専門的知識と技能を備え、広い視野から諸問題に対応できる人材、教員や図書館司書のような、将来地域教育・学術文化を担う人材、あるいは将来研究者を目指す人材を育成することを目的とします。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意欲を持った学生を求めます。

(2) 入学者に求める能力・資質は何か

- ①国語、英語、美術のいずれかについて基礎的な知識・技能を修得している。
- ②自ら問題の解を見いだしていく思考力・判断力・表現力を備えている。
- ③自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身につけている。

- (3) 高等学校段階までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか
- ①国語、英語、美術のいずれかに関する知識・技能の力、及びそれを活用して学問への関心を深めたり、また、作品制作への意欲を高めたりすることができる思考力・判断力・表現力を、一般入試等の学力・実技審査、推薦入試の小論文・実技及び AO 入試の課題や口頭試問により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
 - ②主体的に学び、他者と協働して学問探究に臨む態度を、一般入試、推薦入試及び AO 入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
 - ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）における優れた成績や豊かな経験を、推薦入試や AO 入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。

史学・文化財学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

史学・文化財学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」「専門力」「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士（文学）の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養（人間性の形成に資する幅広い知識、技能）

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力などの基礎的素養を身につけ、本学の建学の理念、教育方針等を理解している。
- (2) 特定の主題について、多角的、総合的、複合的に思考する能力を身につけ、体験や実践の中から学ぶことができる。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な基礎的素養を身につけ、情報処理や英語の基本的なリテラシーを身につけている。
- (4) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力（専門に関する基本的な知識、技能）

<社会的意義>歴史学、文化財科学のもつ社会的な意義や、歴史学、文化財学を学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。

＜職業生活で評価される能力＞歴史学、文化財学の専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特に資料を収集し分析する能力、観察力、洞察力、判断力、表現力、実践力を身につけている。

＜専門に関する能力＞

(1) 日本史・アーカイブズコース

- ①日本史・アーカイブズ学の学修に必要な基礎的な知識を修得している。
- ②日本史の専門領域に関する深い知識を修め、歴史についての多角的な理解、洞察力を身につけている。

(2) 世界史コース

- ①世界史の学修に必要な基礎的な知識を修得している。
- ②世界史の専門領域に関する深い知識を修め、歴史についての多角的な理解、洞察力を身につけている。

(3) 環境歴史学・文化遺産学コース

- ①環境歴史・文化遺産学の学修に必要な基礎的な知識を修得している。
- ②環境歴史・文化遺産学の専門領域に関する深い知識を修め、調査や文化財修復等の知識・技能を修得している。

(4) 考古学・文化財科学コース

- ①考古学・文化財科学の学修に必要な基礎的な知識を修得している。
- ②考古学・文化財科学の専門領域に関する深い知識を修め、調査や発掘、科学分析等の技能を体験的に修得している。

(5) コース共通

- ①4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究を行い、論文にまとめることができる。

3. 汎用力（社会で活用できる汎用性のある能力）

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮するとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働性、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心を持ち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

史学・文化財学科は、ディプロマポリシーに示された学修成果（到達目標）を身につけるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果（到達目標）を適切に分類した科目区分（科目群）を設け、その科目区分（科目群）に応じた科目を設定することを基本とする。各コースで必ず学習すべき内容を扱う科目はコース必修とし、科目の内容に応じて講義＋演習・実験・実習の構成により理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目区分と科目を置く。

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力など基礎的素養を培うために必要な導入教育を行い、本学の建学の精神、教育方針等を学び、学生の学習意欲を高めるため、1年次に科目区分「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの専門分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うため科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な教養を身につけ、情報処理や英語のリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれその内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目群を置き、それぞれの科目群の要請する内容を偏りなく包含する諸科目を設定する。なお、歴史学、文化財学を学修することの社会的意義に関しては教養科目の「基礎演習」で扱い、職業生活で評価される能力に関しては全ての専門科目で分担して扱う。

- (1) 発展演習・専門演習・卒業演習

教養科目の「基礎ゼミ」と一貫する科目群として以下の少人数ゼミを置く。

- ①専門の基礎的な知識・能力を高めるための科目として2年次に「発展演習」を置く。
- ②専門の知識や考え方を深めるとともに、課題の探求力、発表能力などを高め、卒業演習につなげるための科目として3年次に「専門演習」を置く。
- ③テーマを絞って専門の学修を深め、4年間の集大成となる卒業論文（卒業制作）又は卒業研究を完成させるための科目として「卒業演習」を置く。

(2) 学部共通専門科目

文学部各学科共通に履修できる人文系、社会科学系、芸術系の入門的・概論的な知識、技能を修得するための科目群を置く。

(3) 学科専門基礎科目

日本史・アーカイブズコース、世界史コース、環境歴史学・文化遺産学コース、考古学・文化財科学コースの基礎的な知識・技能を修得するための科目群を、各コース共通に幅広く履修できるように学科専門基礎科目として置く。

(4) コース専門科目

日本史・アーカイブズコース、世界史コース、環境歴史学・文化遺産学コース、考古学・文化財科学コースの学修のための専門的な知識・技能を修得するための科目群を下記のコース専門科目として置く。

①日本史・アーカイブズコース

日本史の専門領域に関する知識を深め、歴史についての多角的な理解、洞察力を身につけるための科目群

②世界史コース

世界史の専門領域に関する知識を深め、歴史についての多角的な理解、洞察力を身につけるための科目群

③環境歴史学・文化遺産学コース

環境歴史学・文化遺産学の専門領域に関する知識を深め、調査や文化財修復等の知識・技能を身につけるための科目群

④考古学・文化財科学コース

考古学・文化財科学の専門領域に関する知識を深め、調査や発掘、科学分析等の技能を体験的に身につけるための科目群

(5) 卒業論文・卒業研究

4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究を行い、論文にまとめるための科目群

3. 専門科目、教養科目の共通事項

(1) 授業の内容・方法

- ①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果（到達目標）については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果（到

達目標)を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。

②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。

(2) 初年次教育

多様な新生全員が、学習意欲を沸き立たせ、自ら人間関係を築き、学修計画を立て、主体的な学びを実践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の担当科目、授業内容・方法を工夫する。

(3) キャリア教育

教養科目では、学部・学科共通のキャリア関連科目を置く。専門科目では調査力、協働力、プレゼン力など社会で評価される実践的な知識、技能を修得するよう授業内容・方法を工夫する。

(4) 資格科目

中学校教諭一種免許状(社会)、高等学校教諭一種免許状(地理歴史・公民)、文書館専門職(アーキビスト)、司書、司書教諭、学芸員の免許・資格を取得するための科目を設定する。

(5) 学修成果(到達目標)の達成度の評価とカリキュラムの改善

教員による達成度評価、学生自身による達成度評価のほか、卒業生調査などによって社会からの外部評価を適宜加え、カリキュラム全体の達成度評価と課題の明確化、改善案の策定などを行う。

アドミッション・ポリシー(入学者受け入れの方針)

(1) 学科教育の特色と育成する人材像

史学・文化財学科には、「日本史・アーカイブズコース」「世界史コース」「考古学・文化財科学コース」という3つのコースがあり、学生はこの3つのコースから自らの興味・関心に基づいて主コースを選択します。さらに、主コース以外にも興味・関心のあるコースを副コースとして選択して学修することができるため、すべての領域にわたって複数のコースの専門的学問を修得することができます。また、本学科では、中学校社会・高等学校地理歴史及び公民の教職資格、学芸員資格、司書資格、司書教諭資格、文書館専門職(アーキビスト)修了証を取得できます。

史学・文化財学科では、歴史や文化財について広く深く学び、学習した知識・技能を応用して社会に貢献できる人材、また本学科で取得可能な上記の諸資格を活かしてそれぞれの専門分野で活躍できる人材を育成することを目指します。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意

欲を持った学生を求めます。

(2) 入学者に求める能力・資質は何か

- ①歴史や地理についての基礎的な知識を修得している。
- ②自ら問題の解を見いだしていく思考力、判断力、表現力、探究心を備えている。
- ③自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身につけている。

(3) 高等学校段階までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか

- ①世界史・日本史・地理に関する知識、及びそれを活用して自ら積極的に考察しそれを分かりやすく伝えることができる思考力、判断力、表現力、探究心を、一般入試等の学力審査、推薦入試の小論文及び AO 入試の課題や口頭試問により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ②主体的に学び、他者と協働して学問探究に臨む態度を、一般入試、推薦入試及び AO 入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）における優れた成績や豊かな経験を、推薦入試や AO 入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。

人間関係学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

人間関係学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」「専門力」「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士（文学）の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養力（人間性の形成に資する幅広い知識、技能）

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力などの基礎的素養を身につけ、本学の建学の理念、教育方針等を理解している。
- (2) 特定の主題について、多角的、総合的、複合的に思考する能力を身につけ、体験や実践の中から学ぶことができる。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な基礎的素養を身につけ、情報処理や英語の基本的なリテラシーを身につけている。

- (4) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力（専門に関する基本的な知識、技能）

＜社会的意義＞心理や福祉のもつ社会的な意義や、心理や福祉を学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。

＜職業生活で評価される能力＞心理や福祉の専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特にコミュニケーション力、チームワーク力を身につけている。

＜専門に関する能力＞

- (1) コースの選択に応じて、社会福祉・精神保健福祉、心理、教育・生涯スポーツの各専門分野の専門的な知識を修得し、現場での実践力を身につけている。
- (2) 4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究を行い、卒業論文にまとめることができる。

3. 汎用力（社会で活用できる汎用性のある能力）

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮するとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働力、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心を持ち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

人間関係学科は、ディプロマポリシーに示された学修成果（到達目標）を身につけるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果（到達目

標)を適切に分類した科目区分を設け、その科目区分に応じた科目を設定することを基本とする。各コースで必ず学習すべき内容を扱う科目はコース必修とし、科目の内容に応じて講義+演習・実験・実習の構成により理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果(到達目標)に対応して、以下の科目区分と科目を置く。

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力など基礎的素養を培うために必要な導入教育を行い、本学の建学の精神、教育方針等を学び、学生の学習意欲を高めるため、1年次に科目区分「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの専門分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うため科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な教養を身につけ、情報処理や英語のリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれその内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果(到達目標)に対応して、以下の科目区分を置き、それぞれの科目区分の要請する内容を偏りなく包含する諸科目を設定する。なお、社会福祉・精神保健福祉、心理、教育・生涯スポーツを学修することの社会的意義に関しては教養科目の「基礎演習」で扱い、職業生活で評価される能力に関しては全ての専門科目で分担して扱う。

(1) 発展演習・専門演習・卒業演習

教養科目の「基礎演習」と一貫する科目群として以下の少人数ゼミを置く。

- ① 専門の基礎的な知識・能力を高めるための科目として2年次に「発展演習」を置く。
- ② 専門の知識や考え方を深めるとともに、課題の探求力、発表能力などを高め、卒業演習につなげるための科目として3年次に「専門演習」を置く。
- ③ テーマを絞って専門の学修を深め、4年間の集大成となる卒業論文を完成させるための科目として「卒業演習」を置く。

(2) 学部共通専門科目

文学部各学科共通に履修できる人文系、社会科学系、芸術系の入門的・概論的な知識、技能を修得するための科目区分を置く。

(3) 専門基礎科目

社会福祉・精神保健福祉、心理、教育・生涯スポーツの各コースの基礎的な知識、技能を修得するための科目区分として専門基礎科目を置く。

(4) コース専門科目

社会福祉・精神保健福祉、心理、教育・生涯スポーツの各分野の専門的な知識を修得し、現場での実践力を身につけるための科目区分としてコース専門科目を置く。

(5) 卒業論文

4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、研究を行い、論文にまとめるための科目区分

3. 専門科目、教養科目の共通事項

(1) 授業の内容・方法

①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果（到達目標）については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果（到達目標）を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。

②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。

(2) 初年次教育

多様な新入生全員が、学習意欲を沸き立たせ、自ら人間関係を築き、学修計画を立て、主体的な学びを実践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の配当科目、授業内容・方法を工夫する。

(3) キャリア教育

教養科目では、学部・学科共通のキャリア関連科目を置く。専門科目では社会福祉、精神保健福祉、心理、教育・生涯スポーツの現場で評価される実践的な知識、技能を修得するよう授業内容・方法を工夫する。

(4) 資格科目

認定心理士、社会福祉士、精神保健福祉士の資格を取得するための科目の他に、高等学校教諭一種免許状（公民）、司書、司書教諭の免許・資格を取得するための科目を設定する。

(5) 学修成果（到達目標）の達成度の評価とカリキュラムの改善

教員による達成度評価、学生自身による達成度評価のほか、卒業生調査などによって社会からの外部評価を適宜加え、カリキュラム全体の達成度評価と課題の明確化、改善案の策定などを行う。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

（1）学科教育の特色と養成する人材像

人間関係学科では、心理、社会福祉、教育、生涯スポーツ分野に関する「心理コース」、「社会福祉コース」、「教育・生涯スポーツコース」において、学際的観点に立ち、これらの諸問題を理論的にかつ実践的に対応できる人材、社会福祉士・精神保健福祉士・教員・認定心理士などの資格を取得し、地域社会の活性化あるいは再生を担うことができる人材を養成することを目的とします。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意欲を持った学生を求めます。

（2）入学者に求める能力・資質は何か

- ①心理、社会福祉、教育、生涯スポーツの各分野に関連する科目についての基礎的な知識・技能を修得しており、将来は人間関係学科で学んだことを用いて地域社会に貢献したいという強い意欲を持っている。
- ②自ら問題の解を見いだしていく思考力・判断力・表現力を有している。
- ③自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身につけている。

（3）高等学校までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか

- ①社会福祉、心理、生涯教育（スポーツ分野）の基礎となる科目、及び関連科目の知識や技能を活用し、入学後に自らの希望する専門性を十分に習得できるだけの思考力・判断力・表現力を持っているか、また、身につけた知識・技能を適切に表現できる国語力を持っているかを、一般入試等の学力審査、推薦入試の小論文及び AO 入試の課題や口頭試問により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ②主体的に学び、他者と協働して学問探求に臨む態度を、一般入試、推薦入試及び AO 入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定、評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）における優れた成績や、自分自身や周囲の人間関係に関する問題点について考え、理解や解決を模索したなどの豊かな経験を持ち、多様な学びを元にさらに探求したいという意志を持っていることを、推薦入試や AO 入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。

食物栄養科学部 食物栄養学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

食物栄養学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」「専門力」「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士(栄養学)の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養(人間性の形成に資する幅広い知識、技能)

- (1) 大学教育に必要な基礎的素養を身につけ、また、栄養学および健康科学を学修するための社会的意義を理解している。
- (2) 人間の探求、現代社会の理解、科学技術と環境の理解に必要な教養を身につけ、また、情報処理、運動と健康、国際理解のための外国語の基本的なリテラシーを身につけている。
- (3) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力(専門に関する基本的な知識、技能)

<社会的意義> 栄養学および健康科学のもつ社会的な意義や栄養学および健康科学を学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。

<職業生活で評価される能力> 栄養学および健康科学の専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特に食・栄養・健康にかかわる職業の能力を身につけている。

- (1) 栄養学および健康科学を学ぶための基礎スキルを身につけている。
- (2) 社会・環境と健康の関係、健康の概念、保健・医療・福祉・介護システムについて、基礎的な知識を身につけている。
- (3) 人体の構造と機能、環境変化に対する対応機能および疾病の成因、病態、診断、治療、生体防御について基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (4) 食品の栄養特性・物性と食品成分の人間生活・健康に与える影響および食品の加工・調理や食の安全性・衛生管理について理解し、それに関する実験の技能や調理・加工技術を身につけている。
- (5) 健康の保持・増進、疾病の予防・治療における栄養の役割およびエネルギーや栄養素の代謝の生理的意義について理解し、それに関する実験の技能を身につけている。

- (6) 発育・加齢や妊娠など人体の構造や機能の変化に伴う栄養状態の変化と栄養アセスメント・栄養管理について理解し、それに関する実習技能を身につけている。
- (7) 健康・栄養状態、食行動、食環境に関する情報の収集・分析および栄養教育計画の作成・実施・評価について理解し、行動科学やカウンセリングに関する実習技能を身につけている。
- (8) 傷病者の病態や栄養状態に応じた適切な栄養管理を行うために、栄養アセスメントによる評価・判定方法や栄養ケア計画の作成・実施・評価について理解し、傷病者の栄養指導に関する実習技能を身につけている。
- (9) 国や地域社会の健康・栄養問題や政策および活動、関連要因の情報収集・課題分析について学び、公衆栄養活動の計画立案・実施・評価等について理解し、それに関する実習・演習技能を身につけている。
- (10) 給食運営および物資や人材の資源の利用方法を学び、栄養面・安全面・経営面の管理について理解し、総合的マネジメントに関する実習技能を身につけている。
- (11) 専門基礎分野と専門分野を横断した栄養学および健康科学について理解し、それらを活用できる総合的な能力を身につけている。
- (12) 管理栄養士の活動の場での栄養評価・栄養管理を行うために必要な知識と技術および関連職種との連携を理解し、それらを行うために技術を臨地校外実習で身につけている。
- (13) 実践的な活動の場での課題の発見と解決を通して、卒後に栄養士・管理栄養士として必要な知識・技能を理解し、演習を通じて身につけている。

3. 汎用力(社会で活用できる汎用性のある能力)

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮するとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働能力、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心をもち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

食物栄養学科は、ディプロマポリシーに示された学習成果（到達目標）を身につけるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果（到達目標）を適切に分類した科目区分を設け、その科目区分に応じた科目を設定することを基本とする。必ず学修すべき内容を扱う科目は必修とし、科目の内容に応じて講義、演習、実験、実習の構成により理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目区分と科目を置く。

- (1) 大学教育に必要な基礎的素養を培うために必要な初年次教育を行い、また、栄養学を学修するための社会的意義を理解し、学修意欲を高めるため、1年次に科目区分「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うために科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間の探求、現代社会の理解、科学技術と環境の理解に必要な教養を身につけ、また、情報処理、運動と健康、国際理解のための外国語の基本的なリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれの内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果（到達目標）に対応して、かつ栄養士法施行規則に定められたカリキュラム編成に準拠し、以下の科目区分を置き、それぞれの科目区分の要請する内容を偏りなく、包含する諸科目を設定する。

- (1) 栄養学および健康科学を学ぶための基礎スキル
- (2) 社会・環境と健康の関係、健康の概念、保健・医療・福祉・介護システム
- (3) 人体の構造と機能、環境変化に対する対応機能および疾病の成因、病態、診断、治療、生体防御
- (4) 食品の栄養特性・物性と食品成分の人間生活・健康に与える影響および食品の加工・調理や食の安全性・衛生管理

- (5) 健康の保持・増進、疾病の予防・治療における栄養の役割およびエネルギーや栄養素の代謝の生理的意義
- (6) 発育・加齢や妊娠など人体の構造や機能の変化に伴う栄養状態の変化と栄養アセスメント・栄養管理について理解し、それに関する実習技能を身につけている。
- (7) 健康・栄養状態、食行動、食環境に関する情報の収集・分析および栄養教育計画の作成・実施・評価と行動科学・カウンセリング
- (8) 傷病者の病態や栄養状態に応じた適切な栄養管理を行うために、栄養アセスメントによる評価・判定方法や栄養ケア計画の作成・実施・評価について理解や傷病者の栄養指導
- (9) 国や地域社会の健康・栄養問題や政策および活動、関連要因の情報収集・課題分析、公衆栄養活動の計画立案・実施・評価
- (10) 給食運営および物資や人材の資源の利用方法とそれに伴う栄養面・安全面・経営面の総合的マネジメント
- (11) 専門基礎分野と専門分野を横断した栄養学および健康科学
- (12) 管理栄養士の活動の場での栄養評価・栄養管理を行うために必要な知識と技術および関連職種との連携
- (13) 管理栄養士に必要とされる専門基礎分野及び専門分野の知識および応用力
- (14) 実践的な活動の場での課題の発見と解決と卒後に栄養士・管理栄養士として必要な知識・技能
- (15) 栄養士・管理栄養士として、より深化した多角的な知識や複合的な技術
- (16) 栄養教諭に必要な栄養指導についての知識・技能
- (17) 卒業研究を通じた課題発見とその客観的分析と解決のために必要な知識・技能

3. 専門科目、教養科目の共通事項

- (1) 授業の内容・方法
 - ①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果(到達目標)については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果(到達目標)を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。
 - ②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。
- (2) 初年次教育

多様な新入生全員が、学習意欲を湧き立たせ、自ら人間関係を築き、学修計画を立て、主体的な学びを実践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の配当科目、授業内容・方法を工夫する。
- (3) キャリア教育

教養科目では、職業生活等で評価される能力を培うための科目を置き、食・栄養・

健康にかかわる職業の能力を高めるために「実践演習」を置き、それに適した科目を置く。

(4) 資格科目

管理栄養士国家試験受験資格を取得するための科目の他に栄養士免許、栄養教諭 1 種免許、フードスペシャリスト資格認定試験受験資格、食品衛生管理者・監視員、司書免許を取得するための科目を設定する。

(5) 学修成果(到達目標)の達成度の評価

①教員による「総合評価」

「学生評価」、「教員評価」、「客観評価」、「卒後評価」の評価結果を基に、学修目標の達成度を総合評価し、授業内容の改善を図る。

②「学生評価」

学生自身が自分自身の学業の達成度を自己発展チェックシートにより自己評価する。

③「教員評価」

教員が卒業前に学修成果状況を口頭試問によって評価する。

④「客観評価Ⅰ」

科目区分ごとに「まとめ試験」を実施し、区分で求められる学修目標の達成度を評価する。

⑤「客観評価Ⅱ」

アセスメントテストにより学修目標の達成度を評価する。

⑥「卒後評価」

卒業生調査で、食物栄養学科での教育への評価と社会で実際に必要な能力からの大学教育への評価およびその課題と改善などについて把握する。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

(1) 学科教育の特色と育成する人材像

食物栄養科学科では、食・栄養・健康の分野に関する専門的知識・技術のみならず、必要な倫理観及び問題解決能力の備わった管理栄養士を育成することを目指します。本学科では、地域と提携した主体的・対話的学習（アクティブラーニング）を授業に取り入れており、学生の実践力を育むことで、食・栄養と健康に関する専門家として地域社会の発展に貢献できる人材を育てています。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意欲を持った学生を求めます。

(2) 入学者に求める能力・資質は何か

- ①高等学校教育全科、その中でも国語・英語・理科・数学などについての基礎的な知識・技能を修得している。
 - ②自ら問題の解を見いだしていく思考力・判断力・表現力を備えている。
 - ③自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身につけている。
- (3) 高等学校段階までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか
- ①国語・英語・理科・数学に関する基礎的な知識や概念を理解する力、及びそれらを活用して、生命科学に関連する現象を考察し、自ら判断・表現する能力を、一般入試等の学力審査、推薦入試の小論文及び AO 入試の課題により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
 - ②主体的に学び、他者と協働して学問探究に臨む態度を、一般入試、推薦入試及び AO 入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
 - ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）における優れた成績や豊かな経験を、推薦入試や AO 入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。

発酵食品学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

発酵食品学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」、「専門力」、「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士（食物バイオ学）の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養（人間性の形成に資する幅広い知識、技能）

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力などの基礎的素養を身につけ、本学の建学の理念、教育方針等を理解している。
- (2) 特定の主題について、多角的、総合的、複合的に思考する能力を身につけ、体験や実践の中から学ぶことができる。
- (3) 人間の探求、現代社会の理解、科学技術と環境の理解に必要な基礎的素養を身につけ、情報処理や運動と健康、英語の基本的なリテラシーを身につけている。
- (4) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力（専門に関する基本的な知識、技能）

＜社会的意義＞発酵食品学等のバイオサイエンスのもつ社会的な意義や、バイオサイエンスを学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。

＜職業生活で評価される能力＞発酵食品学等のバイオサイエンスの専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特に研究開発及び衛生管理の能力を身につけている。

- (1) 発酵食品学等のバイオサイエンスを学ぶための基礎スキルを身につけている。
- (2) 化学の基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (3) バイオサイエンスの基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (4) バイオテクノロジーの基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (5) 食についての基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (6) 食の安全の基礎的な知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (7) 発酵と食品に関する専門的な知識を身につけ、発酵食品に関する製造の技術を身につけている。
- (8) 生活環境から地球環境の保全に関して微生物を活用できる知識を身につけ、その活用を図る能力を身につけている。
- (9) バイオテクノロジーについての知識を身につけ、それに関する実験の技能を身につけている。
- (10) 発酵食品の製造や経営に関する知識を身につけ、これを応用できる能力を身につけている。
- (11) 食品の生産、流通、経営に関する知識を身につけ、発酵食品を加工する技術を身につけている。（食品流通コースを選択した学生のみ）
- (12) 化粧品や食品の香りに関する知識を身につけ、これらに関する実験の技能を身につけている。（食品香料コースを選択した学生のみ）
- (13) 就職活動に必要な能力、及び校外実習を通じ自身の進路について理解を深め、将来の目標をたてる能力を身につけている。

3. 汎用力（社会で活用できる汎用性のある能力）

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮す

るとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働力、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心を持ち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

発酵食品学科は、ディプロマポリシーに示された学修成果（到達目標）を身につけるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果（到達目標）を適切に分類した科目区分を設け、その科目区分に応じた科目を設定することを基本とする。必ず学習すべき内容を扱う科目は必修とし、科目の内容に応じて講義、演習、実験、実習の構成により理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目区分と科目を置く。

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力など基礎的素養を培うために必要な初年次教育を行い、本学の建学の精神、教育方針等を学び、学生の学習意欲を高めるため、1年次に科目区分「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うため科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間の探求、現代社会の理解、科学技術と環境の理解に必要な教養を身につけ、また、情報処理、運動と健康、英語のリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれその内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果（到達目標）に対応して、以下の科目区分を置き、それぞれの科目区分の要請する内容を偏りなく包含する諸科目を設定する。また、さらに専門性を高めるため「発酵食品コース」、「食品流通コース」、「食品香料コース」の自由選択コース制をとる。また、各自の希望に応じた自由選択科目の科目区分として（14）～（16）を置く。なお、発酵食品学等のバイオサイエンスを学修することの社会的意義に関しては教養科目の「基礎演習」で扱い、職業生活で評価される能力に関しては全ての専門科目で分担して扱う。

- (1) 専門科目を学ぶための基礎スキル
- (2) 化学の基礎
- (3) バイオサイエンスの基礎
- (4) バイオテクノロジーの基礎
- (5) 食の基礎
- (6) 食の安全の基礎
- (7) 発酵と食品
- (8) バイオサイエンスと環境
- (9) バイオテクノロジー
- (10) 発酵と社会
- (11) 食と流通
- (12) 香りの科学
- (13) 臨地実習
- (14) バイオテクノロジー総合演習
- (15) 教員免許取得関連科目
- (16) 卒業研究

3. 専門科目、教養科目の共通事項

- (1) 授業の内容・方法
 - ①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果（到達目標）については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果（到達目標）を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。
 - ②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。
- (2) 初年次教育

多様な新入生全員が、学習意欲を沸き立たせ、自ら人間関係を築き、学修計画を立て、主体的な学びを实践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の配当科目、授業内容・方法を工夫する。
- (3) キャリア教育

教養科目では、職業生活等で評価される能力を培うための科目を置き、専門科目では発酵食品学等のバイオサイエンスにかかわる職業の能力を高めるための科目を置く。

(4) 資格科目

食品衛生管理者・食品衛生監視員任用資格、フードサイエンティスト資格を取得するための科目の他に中学校教諭1種免許(理科)、高等学校教諭1種免許(理科)、学芸員、司書・司書教諭、バイオ技術者を取得するための科目を設定する。

(5) 学修成果(到達目標)の達成度の評価

① 教員による「総合評価」

「学生評価」、「教員評価」、「卒後評価」の評価結果を基に、学修目標の達成度を総合評価し、授業内容の改善を図る。

② 「学生評価」

学生自身が自分自身の学業の達成度を自己発展チェックシートにより自己評価する。

③ 「教員評価」

教員が卒業前に学修成果状況を口頭試問によって評価する。

④ 「卒後評価」

卒業生調査で、発酵食品学科での教育への評価と社会で実際に必要な能力からの大学教育への評価およびその課題と改善などについて把握する。

アドミッション・ポリシー(入学者受け入れの方針)

(1) 大学教育の特色と育成する人材像

本学科は、発酵食品を含む新たな食の開発やバイオサイエンスの学習に向けて強い意欲と科学的探究心があり、地域社会や国際社会で人々の「食と暮らし」を支える人材の育成を目指します。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意欲を持った学生を求めます。

(2) 入学者に求める能力・資質は何か

- ① 高等学校で学習する理科の基礎的な知識・技能を有している。
- ② 自ら問題の解を見いだしていく思考力・判断力・表現力を有している。
- ③ 自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身に着けている。

(3) 高等学校段階までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか

- ① 高等学校で学習する理科の知識・技能を基盤とし、それを活用して他者と課題解決に

取り組むことができる能力を、一般入試等の学力審査、推薦入試の小論文及び AO 入試の課題や口頭試問により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。

- ②主体的に学び、他者と協働して学問探求に臨む態度を、一般入試、推薦入試及び AO 入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）におけるすぐれた成績や豊かな経験を、推薦入試や AO 入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。

国際経営学部 国際経営学科

ディプロマポリシー（学位授与の方針・学修成果の目標）

国際経営学科は、本学の定める課程を修了し、「教養」「専門力」「汎用力」の3つの力を身につけたと認められる学生に学士（経営学）の学位を授与する。学修にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養（人間性の形成に資する幅広い知識、技能）

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力などの基礎的素養を身につけ、本学の建学の理念、教育方針等を理解している。
- (2) 特定の主題について、多角的、総合的、複合的に思考する能力を身につけ、体験や実践の中から学ぶことができる。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な基礎的素養を身につけ、情報処理や英語の基本的なリテラシーを身につけている。
- (4) 専門分野の学修を通じて、人間や社会、学問等についての基礎的素養を身につけている。

2. 専門力（専門に関する基本的な知識、技能）

- <社会的意義>経営学のもつ社会的な意義や、経営学を学ぶことによって社会でどのような役割を担うことが期待されているかを明確に理解している。
- <職業生活で評価される能力>経営学の専門教育を通して、職業生活等で評価される能力として、特に経営管理及び情報処理の能力を身につけている。

- (1) 経営学についての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (2) 経済学についての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (3) 会計学についての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (4) 観光・地域経営についての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (5) 経営に関連した法律についての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (6) 経営に関連した国際関係の基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。
- (7) 経営に関連した情報システムについての基本的な知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけている。

3. 汎用力（社会で活用できる汎用性のある能力）

(1) 思考力

論理的に考え分析する能力、常に自らの学びを省察し課題を見つけて改善することができる能力を身につけている。判断力、創造力、企画力などを含む。

(2) 実行力

自ら計画し実行することができる。組織での活動においてリーダーシップを発揮するとともに、他者と協調しながら目標を達成する力を身につけている。主体性、協働能力、傾聴力などを含む。

(3) 表現力

自分の考えを的確かつ巧みに文章或いは口頭で表現することができる。場面にふさわしい言葉遣いやマナー、振る舞い、豊かなコミュニケーション力を身につけている。発信力、日本語力、外国語力などを含む。

(4) 情報力

我が国のみならず国際的な動向や問題に幅広い関心を持ち、図書やICT機器を用いて必要な情報を収集できる力を身につけている。情報収集分析力、PCスキルなどを含む。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

国際経営学科は、ディプロマポリシーに示された学修成果の目標（到達目標）を身につ

けるために必要な教育課程を体系的・階梯的に編成する。教育課程の構成は、学修成果の目標（到達目標）を適切に分類した科目区分を設け、その科目区分に応じた科目を設定することを基本とする。必ず学習すべき内容を扱う科目は必修とし、科目の内容に応じて講義＋アクティブラーニングの構成により、理論的かつ体験的に学習できるよう履修形態等を工夫する。教育指導にあたっては、建学の精神「真理はわれらを自由にする」に基づき、学生が学問を通して真理を探究し、確かな知識を修得することによって、独立した主体的な人間となることを基本的な目標とする。

1. 教養科目

ディプロマポリシーの「教養」に示された学修成果の目標（到達目標）に対応して、以下の科目区分と科目を置く

- (1) 大学教育に必要な思考力や表現力など基礎的素養を培うために必要な導入教育を行い、本学の建学の精神、教育方針等を学び、学生の学習意欲を高めるため、1年次に「基礎ゼミ」を置き、その内容に適した科目を置く。
- (2) 特定の主題について、一つの専門分野に偏らずに、多角的、総合的、複合的に思考する能力を養うため科目区分「学際科目」を置き、それに適した科目を置く。
- (3) 人間と文化の探求、現代社会の多面的理解、科学技術と自然環境の理解に必要な教養を身につけ、情報処理や英語のリテラシーを身につけるための科目区分を設け、それぞれその内容に適した科目を置く。

2. 専門科目

ディプロマポリシーの「専門力」に示された学修成果の目標（到達目標）に対応して、以下の科目区分を置き、それぞれの科目区分の要請する内容を偏りなく包含する諸科目を設定する。なお、経営学を学修することの社会的意義に関しては教養科目の「基礎演習」で扱い、職業生活で評価される能力に関しては全ての専門科目で分担して扱う。

(1) 発展ゼミ・専門ゼミ・卒業ゼミ

教養科目の「基礎ゼミ」と一貫する、2年次以降の少人数ゼミの科目区分を置く。

- ①専門の基礎的な知識・能力を高めるための科目として2年次に「発展ゼミ」を置く。
- ②専門の知識や考え方を深めるとともに、企画力、論理力、発表能力などを高め、卒業演習につなげるための科目として3年次に「専門ゼミ」を置く。
- ③テーマを絞って専門の学修を深め、4年間の集大成となる卒業論文（研究）を完成させるための科目として「卒業ゼミ」を置く。

(2) 専門関連科目

専門の学修に関連した人文系、社会科学系、言語系の概論的な知識、技能を修得するための科目と科目区分「専門関連科目」を置く。

(3) 学科専門科目

- ①専門を学習するうえでの共通的・基礎的な内容を修得するための科目と科目区分「共通基礎科目」を置く。
- ②専門分野の知識を身につけ、それを実践で活用する能力を身につけているため科目と科目区分「経営学分野」「経済学分野」「会計学分野」「観光・地域経営分野」「法律学分野」「国際関係分野」「情報分野」を置く。
- ③4年間の学修の総仕上げとして、自らテーマを設定し、論文を作成するための科目と科目区分「卒業論文」を置く。

3. 専門科目、教養科目の共通事項

(1) 授業の内容・方法

- ①ディプロマポリシーの「汎用力」に示された学修成果の目標（到達目標）については、それを計画的に身につけることができるよう、専門科目、教養科目の全科目が学修成果の目標（到達目標）を分担し合い、授業内容・方法を工夫する。
- ②能動的学修、体験的学習、授業時間外学習を充実させるなど、大学教育の質的転換に向けた授業内容・方法を重視し、取り入れる。

(2) 初年次教育

多様な新入生全員が、学習意欲を沸き立たせ、自ら人間関係を築き、学習計画を立て、主体的なマナビを実践できるように、オリエンテーションや導入演習も含めて初年次の配湯科目、授業内容・方法を工夫する。

(3) キャリア教育

職業現場に積極的に出向いて、研修・見学を行ったり、地元企業・組織の経営者や幹部を大学に招いてセミナーを行ったりするなど実務体験を重視した教育に取り組む。

(4) 資格科目

(公務員試験対策) 民法、民法特別講義 1、民法特別講義 2、マクロ経済学特別講義、ミクロ経済学特別講義、地域経営特別講義 1、地域経営特別講義 2、地域経営特別講義 3 など

(販売士 2 級) マーケティング論、マーケティング論特別講義など

(日商簿記) 簿記論 I、簿記論 II、簿記論 III、簿記論特別講義 I、簿記論特別講義 II、簿記論特別講義 III など

(国内旅行業務取扱管理者・総合旅行業務取扱管理者) 旅行業務論特別講義、観光地域論特別講義、観光地理、観光振興論など

(IT パスポート) 情報処理論特別講義、情報処理実習 I、情報処理実習 II

(ファイナンシャルプランナー) 金融リテラシー特別講義

(5) 学修成果の目標（到達目標）の達成度の評価

経営管理、会計・税務、観光地域経営の各分野において経営学を学ぶための基本的スキルを修得し、国際言語能力、国際社会における多文化を理解し得る能力、国際的な企業・行政・文化組織で活躍できる経営管理能力、情報処理能力、さらには倫理性や適応能力を備え、他者と協力して課題解決に取り組むことができる能力を身につけている。

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

（1）大学教育（学部教育、学科教育）の特色と育成する人材像

国際経営学科には「国際経営コース」、「会計・税理士コース」、「観光・地域経営コース」の3つのコースがあり、それぞれ経営管理、会計・税務、観光・地域経営分野について、言語表現や情報処理技術を含む専門的知識を習得します。そしてこれらを活用し地域の発展のために貢献できる人材を育成することを教育目標とします。

このような本学科の教育目的を理解し、目的に描かれた人材に成長するための基礎的な能力・資質を有し、目標に向けて主体的に学び自ら人生を切り開いていこうとする意欲を持った学生を求めます。

（2）入学者に求める能力・資質は何か

- ①主に社会科学系の科目において、地域を含めたグローバル社会を理解するための基礎的な知識・技能を習得している。
- ②自ら問題の解を見いだしていく思考力・判断力・表現力を備えている。
- ③自ら行動し、また他者と協働して学習する態度を身につけている。

（3）高等学校段階までに培ってきたどのような能力を、どのように評価するのか

- ①現代社会、政治・経済等の科目に関する基礎知識を活用して、課題を発見し解決することができる思考力・判断力・表現力を、一般入試等の学力審査、推薦入試及びAO入試における調査書、志望理由書、活動報告書、取得資格等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ②主体的に学び、他者と協働して学問探究に臨む態度を、一般入試、推薦入試における調査書、取得資格・免許、及びAO入試等における調査書、志望理由書、活動報告書等により測定・評価し、その結果を合否判定に用いる。
- ③学校内外の活動（部活やボランティアなど）における優れた成績や豊かな経験を、推薦入試やAO入試等において、調査書・志望理由書・活動報告書等を基に評価し、その結果を合否判定に用いる。